



# 【羽州街道 矢立峠】

秋田県・青森県

## 津軽路を北へ向かう



矢立峠の茶屋跡（津軽公御休所跡・青森県平川市）

### 雪の矢立峠越え

幕末、日本各地の海岸沖に、欧米列強の船がひんぱんに出没し、騒ぎになっていた。日本の将来を憂いた長州秋出身の吉田松陰は各地を巡り歩き、日本の進むべき道について考え続けていた。特に北からの備えが重要だった奥州・羽州（東北）と蝦夷地（北海道）を直接見分したいと考え、嘉永4年（1851）12月、肥後藩士・宮部鼎蔵を伴い、北に向けて江戸を旅立った。



江戸から会津、新潟を経て酒田、久保田（秋田市）、大館、弘前、小泊と進み、蝦夷への渡航地である津軽半島の三厩にたどり着いた。しかし海を渡るといふ願いはかなわず、奥州街道を南下し盛岡、仙台、会津



吉田松陰

を通り、江戸へと戻った。松陰が秋田領から弘前領に入る時通ったのが、羽州街道と矢立峠である。峠を境に秋田杉から青森ヒバの美林へと徐々に景色は変わるが、松陰は峠で「両山屹立如屏風…」と漢詩を詠み、秋田杉に覆われた峠の印象を記した。



吉田松陰が講義をした秋の松下村塾を模築した大館市の松下村塾（秋田県大館市）



大円寺（青森県大鰐町）

### 歴史が息づく弘前

羽州街道は福島県桑折で奥州街道と別れ、山形、秋田、弘前、青森までの約500キロの街道だった。途中の矢立峠について菅江貞澄、伊能忠敬、蓑虫山人など多くの文人墨客が記録に残している。イザベラ・バードもこの峠を大雨のなか苦勞して越えた。文政4年（1821）には、弘前藩主・津軽寧親を暗殺しようとした相馬大事件が峠近くで起きた。また秋田・弘前両藩の藩境争いで、幕府の調停を受けたこともある。このように矢立峠は文化の残り香

### 羽州街道一の難所

矢立峠には江戸時代の街道、明治新道、旧国道7号、現在の国道7号と4本の道がある。最も高い所を通っていたのが江戸時代の羽州街道で、一部を江戸の道と重なりながら明治新道も残されている。

羽州街道の峠部分はほぼ完全に、また明治10年に完成し、その後、14年の明治天皇東北巡幸に合わせて改良した明治新道も良好な状態で残っている。羽州街道全コース中のクライマックスである。

### 街道コラム

矢立峠の整備は両県側から行っている。秋田県側は北羽歴史研究会と矢立自然友の会が中心。特に前者は20年ほど前から草刈り、土留め、手づくり看板を立てたりしている。平川市も2年前から力を入れ、側溝整備や道普請を行っている。（矢立杉の伐根）



弘前城



松陰が会談をした旧・伊東家（青森県弘前市）

- 街道周辺の道の駅は、
- 道の駅・いなかだて（青森県田舎館村）
- 道の駅・虹の湖（青森県黒石市）
- 道の駅・ひろさき（青森県弘前市）
- 道の駅・いかりがせき（青森県平川市）
- 道の駅・やたて峠（秋田県大館市）
- 道の駅・ひない（秋田県大館市）
- 道の駅・たかのす（秋田県北秋田市）
- 道の駅・大館能代空港（秋田県北秋田市）

